

弔辞

新崎, 盛暉 / ARASAKI, Moriteru

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

31

(開始ページ / Start Page)

257

(終了ページ / End Page)

259

(発行年 / Year)

2004-08-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002702>

弔 辞

新崎 盛暉（沖縄大学学長）

中村哲先生。私が先生に接する機会を得たのは、法政大学沖縄文化研究所の設立がご縁でした。沖縄文化研究所、沖文研の設立は、一九七二年、つまり沖縄返還の年です。わずか三〇年前のことですが、加速化する現代史の流れの中では、あのころのことは、私自身にとっても、遠い記憶の彼方にかすんでしまっているような気がします。しかし、なぜあの時期に、総長であった中村先生を所長として沖文研が設立されたのかを語ることが、この「偲ぶ会」の場における私に与えられた役割のように思えます。

沖文研紀要『沖縄文化研究』発刊の辞には、「本研究所は米軍政下から本土復帰に至るまでの人道主義と平和のために大きな役割を果たした中野好夫先生の沖縄資料センターを継承したものであって、同機関の創設の精神に則っている」とあります。

中野好夫先生が、吉野源三郎先生や海野晋吉先生などに呼びかけられて一九六〇年一月に沖縄資料センターを立ち上げられた理由は、一九五〇年代後半からようやく「沖縄問題」の存在が本土にも知られ始めてきたにもかかわらず、沖縄事情を知る具体的資料が東京にはなかった、ということにあります。中野先生ご自身の言葉によれば、「こんな状態では、スローガンの空叫びならいざしらず、具体的な沖縄問題の理解も、明確な知識の上に立った運動もできるはずはない。いずれ沖縄に関する問題は次々と起こるにちがいないが、こんなことでは、とうてい確信をもって沖縄問題にとり組むことは不可能。とにかく問題が起これば、直ちに右から左へと資料提供ができるようなセンター的

なものが東京になければならぬ」ということでした。資料センターの実務は、主に私が担うことになりました。

それから一〇余年。民衆の運動と国際情勢の変化によって沖縄返還が実現することになりました。そのとき中野先生は、民間の個人が沖縄資料センター的なものを運営する時代は終わった、と宣言されます。こうした役割は公的機関によって担われるべきであり、それができなければ、集めた資料は、どこか東京にある大学の図書館にでも寄付したい、というのです。沖縄まででかけなくとも、とりあえず東京でも沖縄問題を勉強する場が欲しい、というのが、東京にこだわる理由でした。

この中野先生の呼びかけに応じて行動を起こしたのが、外間守善法政大学教授でした。このようにして、中村総長を初代所長とし、外間教授を初代副所長とする沖縄研が発足することになるのですが、後に中村先生が話されたり、書かれたりしているところによると、沖縄研の設立は、必ずしも容易なものではなかったようです。とりわけ大学闘争の時代でもあり、現実の沖縄問題に取組むことを目的に設立され、政治、経済、社会等に関する時事的資料の調査・収集・提供、あるいは研究会や講演会の開催等を主な活動内容にしてきた資料センターの「創設の精神」を継承することは、当時の大学としてはかなり困難だったでしょう。中村先生は、沖縄関係資料の寄贈を契機に「世界の中のアジア文化研究の一拠点とした南方文化研究を」推進する学術研究機関を設立するという点を強調して、理事会の承認を得た、といわれます。沖縄研所報第一号の中村先生ご自身の言葉を借りれば、「沖縄は日本の文化を考えるとときに、その原点となるもの、国際的に接点となるものを含んだ宝庫であって、沖縄研究即日本研究そのものであり、ひろく南方文化研究に及ぶもの」だからです。こうして沖縄資料センターをはるかに越える幅広い学術研究機関としての沖縄研が設立されるのですが、その中で、資料寄贈にあたっての中野先生の「一般市民にもできるだけ自由に資料を利用させてほしい」という希望は、きちんと生かされてきました。今でこそ「開かれた大学」は流行り言葉ですが、三〇年前の状況下で、それを実践することは、大学としては、それほど容易なことではなかったはずです。

話はいささか脇道へそれますが、中村先生は、沖縄返還の際の沖縄大学の自主存続にも、手を貸してくださいます。沖縄大学が、文部省の私立大学統合政策に従わず、自主存続の道を選んだとき、大学設置審議会の現地調査団の一員として来沖し、暖かい助言をいただいたと、当時の関係者は語っています。

沖縄研設立時には、沖縄研究に政治色が絡む可能性に慎重ならざるを得なかったといわれる先生も、沖縄問題に距離をおいていたわけではないのです。実は、戦後初めて、一九五六年七月、日比谷野外音楽堂で沖縄問題解決総決起大会が開かれたとき、先生は文化人代表としてこの大会に参加しておられました。沖縄資料センター設立のころ、先生は海外に出かけられていましたが、もし日本におられれば、資料センターの世話人に名を連ねられていたかもしれません。中野先生と中村先生は、先ほど飯田泰三さんの業績紹介でもふれられた憲法問題研究会の月例会の席上で資料センターの法政移管の話をされたとも聞きます。中野先生と中村先生がふたたび対話をされる機会があったら、今の日本の変わり果てた現状についてどのような会話をなさるでしょうか。そんなことを想像しつつ、この弔辞を締めくくらせていただきます。

(二〇〇三年九月三日) 於、「中村哲先生を偲ぶ会」